

学位請求論文審査報告要旨

2013年2月13日

申請者 包 特古斯

論文題目 少数言語の防衛と排除：漢語、モンゴル語およびその「方言」

論文審査委員 イ ヨンスク

糟谷 啓介

松永 正義

1. 本論文の内容と構成

モンゴル語は、複数の国家にまたがって話される言語であり、モンゴル国以外に、中国の内モンゴル自治区ないし新疆ウイグル自治区の一部、ロシアのブリヤート共和国やカルムイク共和国などで使われている。国家という政治的単位と言語とは必ずしも一致しないので、これ自体はけっして特殊な現象ではない。けれども、それぞれの国家においてその言語が異なる地位にあり、しかも隣り合う国家が政治的に対立している場合には、きわめて複雑な問題が生まれる。まさに内モンゴルにおけるモンゴル語はそうした状況にあった。内モンゴルにおけるモンゴル語は自治区の公用語の地位にあったとはいえ、中国語＝漢語の圧倒的な影響にさらされていた。しかも中ソ対立が進むにつれて、中国とモンゴル人民共和国との政治的対立が生まれると、内モンゴルの言語政策をどのような方向で進めるかという問題は、大きな政治的な意味をもつこととなった。本論文は、中国内モンゴル自治区におけるモンゴル語政策の変遷をとりあげ、そこにどのような政治的・社会的な作用が及んだかを明らかにする研究である。なお、本論文では日本で「中国語」と呼ばれる言語の名称として「漢語」が使われる。

論文構成は以下のとおりである。

序章 防衛のための排除——少数言語の宿命か

第1部 出発：統一化と挫折（1947－1958）

第1章 モンゴル文字からキリル文字へ

第1節 キリル文字化の早期と背景

第2節 モンゴル文字からキリル文字へ

第2章 言語的統一化の試みと挫折

第1節 同一の文字から同一の書きことばへ

第2節 言語的統一化に向けて

第3節 キリル文字化の挫折

第2部 後退：「接近」と「融合」（1958－1962）

第3章 漢語への「接近」と「融合」

- 第1節 語彙をめぐる攻防
- 第2節 東部方言の基礎方言昇格——チンゲルタイの試み
- 第3部 低迷——政治と言語（1962–1971）
 - 第4章 四清運動とモンゴル語（1962–1966）
 - 第1節 漢語への更なる接近
 - 第2節 言語問題の政治性——ブレンサイン批判を通して
 - 第5章 文化大革命とモンゴル語（1966–1971）
 - 第1節 1950年代の言語問題への第清算——言語の政治性
 - 第2節 宣伝・闘争手段としてのモンゴル語——政治的言語
- 第4部 復活：希望と課題（1971–1985）
 - 第6章 標準語の確定および普及の現実
 - 第1節 標準語の確定
 - 第2節 普及されぬ標準語——少数言語を維持することの難しさ
- 終章 排除なき防衛は可能か——少数言語の維持と多様性に向けて
- 参考文献
- 年表
- 付録

2, 本論文の概要

序章では、内モンゴルで話されるモンゴル語の多様性とそのなかでの東部方言の独特な位置づけが描かれる。東部方言が話される東部地域は、清朝末期の開墾政策によって早くから漢人が移住した場所であり、それによって東部モンゴル人の生活様式が遊牧から農耕生活に移ったこと、そしてモンゴル語に漢語の影響が多く入りこんだことが指摘される。後半では、先行研究の成果をまとめつつ、各章で論じる問題を簡潔に提示して、論文全体の見取り図を描いている。

第1章では、内モンゴルにおけるモンゴル語のキリル文字化の過程をあつかう。1947年5月に内モンゴル自治政府が成立して以降、キリル文字の学習が広がり、1955年7月には内モンゴル自治区人民委員会において「キリル文字を普及させる件に関する決議」が採択された。これは、キリル文字化を完成させていたモンゴル人民共和国のモンゴル語との一体化を目指す動きでもあった。

第2章では、人民共和国と内モンゴルの間で書きことばの統一へと向かおうとする動きが論じられる。1955年6月から言語学者を中心とした内モンゴルの方言調査が行なわれ、その結果、人民共和国のモンゴル語に近い西部方言を書きことばの基礎とする方針が立てられた。この時期には、人民共和国のモンゴル語の多くの語彙が、内モンゴルに取り入れられた。ところが反右派闘争のなかで、国外のモンゴル語との一体化を図る動きは「地方民族主義」として厳しく批判され、1958年3月に内モンゴル自治区人民委員会はキリル文字化を断念する決定を下した。こうして生まれた文字の分断は今日まで続いている。

第3章では、1958年から1962年までのモンゴル語に対する言語政策があつかわれる。

この時期の前半を占める大躍進政策の時代には、諸民族の言語を積極的に漢語に同化させることが提唱された。それが「接近と融合」というスローガンである。1959年に発表された人民委員会の決定では、人民共和国のモンゴル語からの借用語を追放し、代わって漢語から借用を進めることが奨励された。そのやり方は漢語の単語をそのまま音訳することである。この時、それまで漢語の要素が多い「混合語」として低く評価されていた東部方言が、「先駆的な存在」として「再評価」されることとなった。モンゴル人の言語学者チンゲルタイは、「混合語こそ言語の発展法則に合致する」と述べ、東部方言を基礎方言に格上げすることを主張した。この方針は1962年1月の「全自治区民族語文民族教育工作会議」で承認されて公布された。

第4章では、四清運動（1962～66）の時期があつかわれる。大躍進政策が悲惨な結果に終わると、それまでの民族政策の見直しが行われた。しかし、1962年末から始まった四清運動のなかで、民族問題は固有の問題ではなくすべては階級問題であるとする階級還元論が登場すると、少数民族の漢語への同化政策がまたもや進められた。この時期には、過去の言語問題の洗い出しが行なわれた。たとえば、1950年代にキリル文字化にかかわった言語学者ブレンサインは「民族分裂主義者」として批判され65年に逮捕された。このブレンサインのことは、司馬遼太郎の『草原の記』のなかでも描かれている。

第5章では、文化大革命の時期にモンゴル語のおかれた状況が論じられる。文革のなかでは、人民共和国と内モンゴルの言語的統一を図ろうとしたという「言語問題」だけでも十分な「罪状」とみなされ、多くの政治家や知識人が粛清された。その最高潮が、内モンゴルで最大の被害を生んだ「内モンゴル人民革命党」事件である。内モンゴル人民革命党はかつて人民共和国と内モンゴルの統一を目指した組織であったが、47年の自治政府成立のときに解散した。ところが、文革のなかで、この人民革命党は建国以後に再結成され中国からの分離を画策していることとされ、その嫌疑を受けた多くの者が犠牲となった。文革のなかで、モンゴル語の出版物の数はむしろ増えていったが、それはモンゴル語を思想宣伝と闘争手段として用いたためであった。

第6章では、文化大革命終了後の内モンゴルにおける言語問題が論じられる。文革が終息に向かうにつれて、それまでの漢語一辺倒だった語彙作成の方針も見直された。それにつづいて、モンゴル語のラテン文字化や基礎方言選定の問題がとりあげられた。1978年ごろから、モンゴル語の標準語確立をめぐる議論が活発化するが、さまざまな方言分類の案が出された結果、「標準語の基礎を内モンゴル方言におき、標準音はチャハル下位方言におく」という曖昧な形で決着し、80年に内モンゴル自治政府によって公布された。現状では、内モンゴルでの標準語は確立されておらず、そのため口語とは距離のあるモンゴル文語が継続して使用されている。

終章では論文全体をまとめて、これまでの内モンゴルの言語問題は、漢語、モンゴル語、そしてモンゴル語内の方言という三者の関係の変化によって様相を変化させてきたことが述べられる。ここで筆者が目にするのは、漢語要素を多く含む東部方言の位置づけである。モンゴル語の「モンゴルらしさ」を強調する立場から、この東部方言は常に否定的な評価をされてきた。しかし著者はそこに大きな問題を見ており、「自らも『周辺の存在』である

少数言語が、その存続のために、あえてそこに内包されている『周辺的存在』を排除しなければならないとすれば、その存続の意義も問われなければならないだろう」という文で論文をしめくくっている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の通りである。

第一に、内モンゴルのモンゴル語に対する認識や政策が、中国国内の政治状況だけでなく、中国とモンゴルないしソ連という国際関係の文脈に左右されていたことを詳細に論じることで、内モンゴルにおける言語問題の固有性を鮮明に描き出したことである。著者は、具体的な政治的事件をいくつか取り上げることで、言語がおかれた政治的文脈を照らし出している。また、言語問題が政治問題化するプロセスを、多くの資料を用いて的確に論じている。この点に関する著者の手腕は高く評価できる。

第二に、モンゴル語における漢語要素の問題、さらにそれと関連して内モンゴル内部の西部方言と東部方言の差異ないし対立の問題をとりあげることで、内モンゴルにおける言語問題の複雑な様相を重層的に描き出したことである。著者は、内モンゴルのような状況では、方言分類という学問的な手続きがすぐさま政治的な意味を帯びてしまうことに注意しながら、中国語とモンゴル語との関係をどうとらえるかという問題が、東部方言に対する評価の変遷のなかに凝縮して現れていることを明らかにした。これは本論文のなすとげた最大の成果であるといつてよい。さらにそれを通じて、少数言語における標準語の確立のなかにひそむジレンマにまで問題を掘り下げたことは高く評価できる。この点については、著者自身が内モンゴル東部地域の出身であることが大きな利点となっている。

けれども、本論文に問題点がないわけではない。

第一に、言語をとりまく政治状況の分析に成功した一方で、言語に内在的なレベルについての考察が不十分になったところがある。たとえば、標準語形成に関して、特定の地域の話しことばをそのまま採用するやり方と、あらゆる方言を超えた超地域的な変種を作り出すやり方との対立は、多くの言語において見られる問題である。本論文で取り上げられた内モンゴルでの標準語をめぐる議論のなかには、そうした一般的な問題とモンゴル語に固有の問題が混在しているのだが、その区別が明瞭になされていないために、かえって内モンゴルでの議論の固有性——たとえばモンゴル文語への対応——が見えにくくなっているのは残念である。また、西部方言と東部方言の違いについて、より具体的な記述がなされていれば、議論を一層説得的にすることができただろう。

第二に、本論文が内モンゴルにおける言語問題を対象にしている以上、仕方のないことかもしれないが、人民共和国やブリヤートにおける文字政策や規範化との関連にもふれていれば、より複眼的に問題をとらえることができただろう。たとえば、ブリヤート共和国やモンゴル人民共和国においてモンゴル語のキリル文字化が確定するまでには、大粛清を始めとしてさまざまな紆余曲折があった。また、これらの国や地域においても、基礎方言をどこにおくかという問題は、内モンゴルと同じように、きわめて大きな政治的意味をもっていた。こうした歴史的事実についての考察を進めることで、地域的多様性をこえて意

識される「モンゴル語」の一体性はどのようなものか、という大きな問題に取り組むことができるだろう。

第三に、個々の政策に対する評価のなかで、少々短絡的な判断が下される箇所がある。そのことは本論文の説得力をかえって弱める結果ともなるので、それぞれの時期の政治的文脈を十分に考慮した客観的な議論が望まれる。

しかし、以上の点は本論文の欠点というよりも、著者が本論文を土台にしてこれから取り組むべき課題を示しているといえよう。一貫した視点から内モンゴルにおける言語問題の展開そして言語と政治の関係をあつかった本論文は、歴史的社會言語学の労作として高く評価することができる。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

2013年2月13日

論文審査委員

イ ヨンスク

糟谷 啓介

松永 正義

2012年12月26日、学位請求論文提出者 包 特古斯 氏の論文「少数言語の防衛と排除：漢語、モンゴル語およびその「方言」」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、包 特古ス 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、包 特古ス 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。